

岡田一男

今日は、アメリカというかアラスカ州内陸部の町、フェアバンクスにあるアラスカ大学博物館名誉学芸員、レオナルド・カマリングの作品を見ながら、アメリカの映像人類学の一つの到達点を見ると同時に、イヌイト、エスキモーに関わる北方圏民族誌映像の過去と現在についても考えて見たいと思います。

人類学、民族学調査に映像機器を持っていくことは常識となって久しいですが、これが最初に行われたのは、1896年の英国、ケンブリッジ大学のアルフレッド・コート・ハットンによるトレス海峡先住民調査とされています。この時代は帝国主義国家による探検時代で、発明間もない映画機器は、さまざまな未開の地に持ち込まれました。北極圏も例外ではなかったのです。この地域は、寒かった。零下20度の寒さに映画フィルムを曝すと、たちまちボロボロに砕け、粉々になってしまいます。それでも人々は、防寒に心を配って撮影を続けました。

今年、第1回の研究会はロバート・フラハティの『極北のナヌーク』1922年を取上げました。この作品は、多くの場合、ドキュメンタリー映画の始まりのように考えられていますが、一方で、映画の誕生から四半世紀に人々が経験した蓄積を総括したものであるという側面が重要だと考えています。フラハティが記録したのは、カナダの北東部、ハドソン湾東岸のイヌイトです。グリーンランドからカナダの北極圏、アラスカ、ロシア極東チュコト半島までの広範な地域に暮らす、かつてはエスキモーと呼ばれていた人々です。近年では、カナダやグリーンランドでは、エスキモーは近隣のインディアンが呼んでいた差別語であるとして、自称の人間という意味のイヌイトで呼ばれるようになっていますが、アラスカやチュコト半島では、人々は、イヌイトと呼ばれることを拒んでおり、逆に、自分たちはエスキモーであると堂々と主張しています。彼らの自称が、イヌピアート、あるいはユピックであることと関係している様です。今日、ご紹介するのは、ベーリング海のロシアとの国境付近のセント・ローレンス島のガンベルと言う村で1970年代後半に撮影された、シベリア・ユピック語を話す人々のクジラ漁の記録です。この島では、海獣漁としてはセイウチ漁も行われていて、その二つが作品化されています。

作品上映の前にもう一つ、イヌイトを扱った映像作品の中には、再現撮影あるいはもっと積極的に劇映画構成のものが少なくないことも指摘しておきたいと思います。1930年代後半には、偉大な探検家であるクヌード・ラズムッセンによる『パロの結婚』というトーキーのデンマーク映画があります。日本でも川喜多夫妻の東和映画により公開されています。また1960年代にはブルガリア人でカナダ、モントリオール大学の文化人類学教授だったアセン・バリクシらによるカナダ、バフィンランドのネツリックの1920年代末設定の大シリーズが制作されています。いずれも、人類学者が注意深く設定を行い、その土地のイヌイトが伝承されてきた衣装をまとって再現撮影で記録されています。そして1980年代後半、ビデオ機器が普及すると、イヌイト自身による映像制作が始まります。ハドソン湾西岸のイグルーリックのイヌイト、ザック・クヌークはカナダで始まったイヌイト放送協会(IBC)のスタッフとして技術訓練を受けた後、故郷の村で、住民を動員したコスチュームプレイの作品制作を始めます。映像制作がイグルーリック村の地場産業のようになったのですが、その頂点はメロドラマ『氷海の伝説』として映画館公開され、国際映画祭でも最高賞を受賞しています。カナダの動向を見ると先住民民族誌映像のトレンドは先住民自身の映像作家が、自分の属する民族について語る作品の比率が非常に高くなっていることを指摘しておきたいと思います。

ひるがえってカムリング作品は、こうした演出を一切排して、現実に目の前にいる同時代人としての先住民の姿を追います。そして彼らの考えを日常話している母語で記録します。民族語を話す者の言葉は、必ず意思疎通言語(通常は英語)の字幕を付します。民族語を強制もしません。

作者としての意思は、様々な証言のここぞという部分のピックアップと構成によってのみ表現されています。もう一つ特徴的なのは、事前の十分な作者とコミュニティの話し合いにより、作者の思い込みを排して、コミュニティの記録に遺しておきたい事柄を明確にしておき、それを記録するという姿勢です。

『冬の太鼓』は、時間の関係で、抜粋しかお見せできませんが、彼のエスキモーを記録したシリーズの最終作であり、代表作です。全長 90 分、アラスカ本土のベーリング海沿岸、エモナクという村で、冬の長い夜を男子集会所に集まって過ごす人々のうちわ太鼓による歌と踊り、そして近隣の村との宴会=ポトラッチを描いています。被写体となっているのは中央ユピックと呼ばれるエスキモーたちで、様々な舞踊にあたって使われるユニークなデザインの仮面で知られています。これらの伝承は、外来の様々なキリスト教の抑圧を受けます。この地域は 1733 年から 1867 年までロシア帝国領で正教会の影響を受け、さらに米国領になると様々なキリスト教宗派の宣教師たちが、エスキモーの伝統的信仰を放棄させ、改宗させようと試みます。

90 分全部ご覧になりたい方は: <https://vimeo.com/manage/videos/835985043>

最後の『国の心』は、北海道、南富良野町でカムリングが一家で長期滞在し記録した和人の小学校の校長先生の記録です。彼にとっては初めてのビデオ作品でした。岡田はカムリングを 1990 年に北海道立北方民族博物館のための映像収集の過程で知合いました。それよりずっと古く、深いつきあいを続けていたのはイヌイト=エスキモー音楽の研究者、谷本一之先生です。谷本先生は、当時北海道教育大学の学長でした。彼の支援で、この作品は実現しました。

それでは、どんな点を自分の作品に取り入れようと考えているのかをお話ししておきます。一つは作品と地域コミュニティの関係性です。久高島は小さなコミュニティです。翻って私たちが記録したイザイホーは島を上げての大祭でした。現在の島人も、直接体験した人は少なくなっていますが、体験しなかった人々も、体験した人々の係累であり、当事者なのです。島人との意見交換を大切にすると同時に、成果の還元として、公開作品と出版物(冊子)の DVD セット全戸 1 点無償配布を考えています。

それと久高島方言の話者限定ですが、出来る限りインタビュー証言を久高島方言でお話しただくことをお願いしています。ティルルなどでやった原音書起こしと現代語訳を字幕で付します。現在既に久高島方言の話者は、高齢の方々に限られます。広く公開される映像で、イラブーという現行の久高島における生産活動というアクチュアルなテーマについて語られる久高島方言を通じて日本語の多様性について問題提起ができればと考えています。

先住民自身の映像作家の創出というテーマでは、カナダが先鞭を切っておりますが、1990 年代前半には、カナダやアラスカの映像人類学者がロシアの学者のサポートを受けて西シベリアの北部ハンティの集落でセミナーを持っています。直近では、カムリングはノルウェー最北部のトロムソ大学で、サミの若者たちを対象に映像人類学の講座を持っています。彼のビデオメッセージは、昨日、トロムソから送られてきたものです。

再視聴を希望される方には、Vimeo の URL をお知らせしますので、岡田にご照会ください。
k-okada@tokyocinema.jp